

瞬間

前田可博

みどりなる小さき浪の私語は清らなる牧羊神の笛ときよ

月あかき夜の白き潮騒はうるはしき妖女のうたときよて

遠く黄昏るゝ追憶に強く癡愁のぼたるさるするは若く惑ひたるおもひ

かの悲しき心のむしは花の如くにも赤き珊瑚樹となして忘却のなみまに沈め

かの淋しき心のおりはつやゝかな圓き小石となしてをぐらき既往の淵に埋め

なつかしき追憶への思慕を群なす魚の如くにも「今日」と「昨日」の世界に泳がしめ
くるほしき追憶への戀情は二枚の貝殻の如くにも「現實」に「幻想」の觀念をとちて
空高く登りては奇しき光を放つよるこびの星とはなれる

その瞬間なり

あまき感傷の飛沫に濡れて生命のほのほたちてみなそこ深くよるこびの星のおつるは
惱ましき陶酔の潮に溺れて蒼白き海盤車となりては冬の如くにもその亡骸を曝らすは。